

## 自己評価報告書(最終報告)

報告者

芸術系コース(美術)  
／武市 勝

## ■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

## I. 学長の定める重点目標

## I-1. 科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され、教員の研究費配分も厳しくなっており、教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで、科研費申請に向けて、あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

## 1. 目標・計画

・数年前までは応募だけでもという思いもあり、種々のテーマで科研申請を行ってきたが、美術専門領域それも実技系のものについては甚だ厳しい現実があり、応募を停止している。  
・代わりというわけではないが、昨年から奨学寄付金を拠出し、これを研究のための支援資金にしている。今年度も5-60万円程度を充てる予定である。個人的には外部資金ではないが、本学にとってはそういう扱いになるかと思われる。  
・思うに、美術系実技が科研を得るのは本学に限らず困難である状況は続く。とすれば視点を転換し、たとえば「美術系教員が作品を販売した場合、その利益は全額奨学寄付金として本学の外部資金に拠出すること、ということにしてはどうかと思う。筆者の寄付金はそれに該当しないが、そうすれば実技系教員のひとつの励みになるのではないか。  
・科研申請に関して、できれば実技系教科での科研獲得事例などを講演していただければ応募することはやぶさかではない。

## 2. 点検・評価

## 1. 目標・計画

・奨学寄付金の申し入れが遅れ、年度内には実行することができなかった。先に寄付した額が残っているためもあるが、個人的事情もあって多額を要する研究活動に躊躇したためでもある。正直言えば、寄付金による経費は退職までに使い切りたいため、金額に迷ってしまい、それなら個人的に研究に使えばいいと思ったためである。実際、退職後はそうなるわけだが。

次年度内(退職直前の1年)に使う研究の額が明確になった時点で寄付金を申し入れようと考えている。

・科研申請は年度目標でも中間報告でも記した通り、実技系は困難であると感じている。

## I-2. 大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で、あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか、具体的に示してほしい。

### 1. 目標・計画

・本学の大学院定員の方向は、長期履修生の増大によって達成するしかないと考えている。財政緊縮を受けて各都道府県の送る現職再研修の数が減少しており、また教職大学院の数も全国的に多いため、当初予定ほどの狭き門ではない。そうすると残る可能性は全国教員採用合格率がトップレベルであることによる誘因力である。このためにはなにより大学院生のための「就職支援」に重点を置くべきである。少なくとも長期履修オフィスも含め、入学後に合宿研修を行って教職への「ねじ巻き」を行うべきである。学部のみならず院生の合格率が上がれば必然的に鳴門の存在が大きく浮かび上がると思われる。

・美術コースでは、かつての教員定員であった12名の時代からすると現在は8名、内1名は外数である。12名時代で達しなかった定員が、かりに現在充足した場合、個人指導を主とする実技系美術で円滑な運営ができるか心もとない。

### 2. 点検・評価

・長期履修をどうやって拡大していくのだが、これは地道な宣伝活動が第1、また大学院生の教員採用合格率の向上が第2と考える。

本学は、教員養成の本道を歩んでいると感じられるが、皮肉にも、本道を歩むことは定員割れになる恐れはついてまわらずである。

そのような中で、教員採用試験の学部合格率の高さは多くの長期履修生を集める要因であろうが、やはり大学院での合格率日本一がなせば、より充足は大きくなると思われる。なにより、しばしば感じるのは、本学の大学院生の中にはとても教員としてふさわしい人材とは思えない不祥事が散見されることである。これはコースを問わず見られる。定員充足のうえ、「おかしい」と感じられる受験生や在学学生を、遠慮なく不合格、退学にできなければ、本学大学院の水準が向上するのは無理であろう。

・中間報告で書いたことに重複するが、主に中国からの留学生がまず研究生として在学する許可を取り、そののち大学院を受験する、というパターンがかなり定着している。しかし、彼らの多くは「日本の大学で修士号をとり、帰国していい職に就きたい」というのが目的で、必ずしも教員養成大学でなくてもいいと思えない。そのため、一番困るのが「教育実践フィールド研究」のような必修科目である。

何度かコースでも話し合ったが、「定員充足のためとはいえあまりにも教員養成にはふさわしくない、あるいは入り方がずるい」と思われるケースは積極的に拒まざるを得ないと感じられた。

・さらに美術・実技系で悩ましいのは、上記のような理念の一方で、実際に教員採用試験を受けて教員になっていくという熱意のある院生（長期履修も含む）が比率的に少ないと思われることである。全般に美術大学系からの入学が多いため、当該美術大学で大学院がないか、あっても入れなかった学生が来る場になっている。このような人材（実技を続けたい、教育にさほど熱意はない）を、開拓し、勧誘し続けるのは、定員充足のためであってもやや疑問である。

・私見だが、定員を見直して新しい組織体制に改組するか、さもなければ定員を割っても一定水準を保つためにおかしいと思われる人材は遠慮なく拒否する態勢を保ち、これを継続することでいつかは良い循環になることを期するしかないのではないか。

## II. 分野別

### II-1. 教育・学生生活支援

#### 1. 目標・計画

現在は2名の大学院ゼミ1年次生をもち、学部4年次生のクラス担任である。退職まで残り少なくなっているが、各学生の指導をきめ細やかにし、可能な限り円滑な卒業・修了につながるよう心がけている。

教育面では、週一度のゼミ、大学院授業受講生（13名）に対する版画指導、学部授業受講生（11名）への基礎版画指導、百名を越える図画工作Iの受講生への基礎的素描指導、学部1年次の専門的素描指導などを行っている。その他、コアカリキュラムとしての初等中等授業実践I、同基礎などを複数教員と担当している。

本年度の課題として大きいものは、担当している新しいゼミ生2名の専門業績をどれほど上げることができるかということである。

#### 2. 点検・評価

全体はさほど大きな支障はなく進行したと感じている。

2点だけ気づきを記しておく。

・中国からの留学生が、周囲の学生としばしば諍いを起こしたことがあった。日本語未習熟による誤解から来たものもあり、また本人の血の気の多さもあるようだ。同じ中国人同士でも諍いを起こしているのだから、指導教員としては気にしている。

・中間報告で記したクラス担任学生の1人は進学し、1人は留年した。後者は学生寮で「引きこもり」に近い状況が数ヶ月続いたためである。担任として当人の個室に入り、じっくり話したりしたが、現在の学生寮は完全に殻の中に閉じこもれば誰も引き出すことはできないような構造になっているのに驚いた。筆者の時代は個室ではなかったため、本学の状況がうらやましく思ったが、今日のような「オタク化」「引きこもり」などがポピュラーになっている時代では、各室にインターホンのようなものをつけるとか、設備的になんらかの措置が必要なのではないか。

ただとも大きな問題にはならず、その他の教育活動も順調に終わることができていると思われたのは幸いである。

## Ⅱ-2. 研究

### 1. 目標・計画

・昨年度からの継続制作としてのシルクスクリーン写真製版による表現を、7月下旬に東京京橋の画廊で発表することを計画している。

・平行して「紙漉による凹版刷り」の研究を考えている。通常、版画はプレス機やバレンなど、なんらかの圧力をかけて印刷することが多いが、それは版に付着している顔料(インク)を印刷紙に移すためである。手漉き紙は、粉碎した植物繊維を含む水にネリを加えて漉き、これを平らな面で乾かす。この平らな面を顔料が付着した版に代えればどうであろうか。版についた顔料は、手漉き紙の乾燥とともに和紙に移り、圧力は必要ないはずである。

以上の実験調査を、年内に阿波和紙伝統産業会館で集中的に行う予定である。

### 2. 点検・評価

・11月の徳島版画十回記念展において、シルクスクリーン多色刷り「水景Ⅳ」、同じく国民文化祭参加選抜作品で「マチ波」を発表した。

この間のことは、県主催の行事とも関連があったため、県内の新聞をはじめとしたメディアで個人も含めてかなり紹介された。

・研究としての紙漉凹版刷りはやはり延期中だが、次年度に行う予定の「コラグラフィメディウムプリント」が、この橋渡しになっ

## Ⅱ-3. 大学運営

### 1. 目標・計画

・拡大教授会を含めた各種会議に参加する。

・学部入試委員、施設整備委員として学内の運営に参画する

### 2. 点検・評価

・各種会議については、予定通り学内での運営活動に参加した。

## Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

### 1. 目標・計画

・教育実習の指導などで附属との連携を深める

・県内の版画集団である「徳島版画」の活動を推進する

・欧州及び東南アジアの版画制作及び版画教育の実情視察を行い、研究に還元する

以上の活動は以前からも行ってきたが、今年度も継続する予定である。

### 2. 点検・評価

予定通り進捗した。

・とくに徳島版画については新聞、テレビなどで紹介され、個人の活動も記事にされたため、多くの観客を集めることができた。

・東南アジアについては、今年度は見合わせる結果になった。インドネシアやフィリピンの世情がいまひとつ安定的ではないと感じられたため見送った。時をあらためたい。

## Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

今年度は特に事項として記すべきことはない。総括的に言えば、早期退職をコース内で表明したが、断念せざるを得なかったことが後半の活動にも影響したかと思っている。予定が狂ったため、立て直すのに時間がかかった。

少なくとも次年度は大学教員として思い残すことなく活動したいと考えている。